

# 菩提木遺跡

——国道291号線道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書——

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 菩提木遺跡

——国道291号線道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書——

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 序

関越自動車道、上越新幹線の建設は北毛地域の交通網に大変革をもたらしました。月夜野インター、上毛高原駅はアクセスする周辺道路網の整備を必要としました。上越新幹線上毛高原駅建設に関連する周辺整備の一環として国道291号の拡幅工事が実施され経塚である菩提本遺跡に影響が及ぶこととなり緊急発掘調査が実施されました。

以前道路工事を行ったおりに掘削され埋め戻しされていたもので遺構の状況は判明しない部分がほとんどでありました。経石は4、5センチメートルの平らな石に経文を一字ずつ記したものであります。伝承によりますと、江戸時代初期に在地の僧が作ったとされますが、江戸期の信仰のありようを示す資料として貴重なものであります。

調査並びに整理事業を通じまして賜りました群馬県土木部、群馬県教育委員会のご配慮、ご指導に感謝申し上げます。

発掘調査、整理事業の担当者、作業員、補助員の労をねぎらうと共に本書が庶民信仰の研究の資料として近代社会解明のために広く県民の皆様にもちいられることを願いつつ序とします。

昭和57年2月15日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎



## 例 言

1. 本書は、国道291号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
2. 菩提木遺跡は、群馬県月夜野町931-1番地に所地する。
3. 発掘調査は、群馬県沼田土木事務所の委託により（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が下記により実施した。

調査期間 昭和56年7月27日～昭和56年8月2日

調査担当者 細野雅雄 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団  
西田建彦 群馬県教育委員会文化財保護課

4. 本書の作成は下記の者が担当・協力した。

整理担当・編集 徳江 紀 齊藤利昭

本文執筆 井上唯雄 唐沢至郎 西田健彦 徳江 紀 齊藤利昭

遺構写真 細野雅雄 西田健彦

遺物写真 佐藤元彦

図版作成 保坂雅美

5. 本遺跡に関する調査記録及び出土遺物等は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
6. 本書の作成にあたり、下記の方々から指導・助言・協力・資料提供を賜った。

群馬県教育委員会文化財保護課 群馬県沼田土木事務所 月夜野町教育委員会

小林起久治 白石保三郎 沢井良之助 井上唯雄 近藤平志 中束耕志 相京建史

国定 均 笠原秀樹 山本朋子 吉田有光 柳岡良宏 関 正江 岸 トキ子

関口加津枝 立見美代子 田中精子 五十嵐由美子 植茶智龍 三宅敦気 中束彰子

(敬称省略)





## 凡 例

1. 遺構実測図中の方位記号は磁北を表す。
2. 遺構実測図中のコンタは標高429mから減じた数値である。
3. 遺構断面図中の基準線上の数値は標高であらわした。
4. 遺物写真は1/2を原則とした。
5. 第1図は建設省国土地理院発行の1/25,000地形図「後閑・猿ヶ京」を使用した。

## 目 次

序	
例 言	
凡 例	
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 発掘調査の方法と経過 .....	1
3. 遺跡の立地と地形 .....	2
4. 検出された遺構及び遺物	
(1)遺構 .....	3
(2)遺物 .....	6
5. まとめ .....	9
写真図版	



## 1. 調査に至る経緯

高速交通網の整備に伴う上毛高原駅周辺は、急激な変化を遂げた地域である。本線工事は勿論のこと、駅前の整備を中心とした国道291号街路改良工事、月夜野バイパス道路建設工事が相次いで実施された。その中で月夜野バイパスと上毛高原駅周辺をつなぐ国道291号線道路改良工事の計画が持ち込まれたのは昭和56年度に入ってからのものであった。この工事計画に合わせてみて早急な対応を迫られたのが、この菩提木遺跡である。

6月をはじめ、沼田土木事務所から連絡を受けた県教育委員会文化財保護課は地元月夜野町と共に現地調査を実施し、旧291号道路脇の塚が以前、道路拡張の際、川原石に文字の書かれたものが出土したこと、それをまた穴を掘ってそこに埋め戻したことを確認し、遺跡と認定した。工事は既に着手されており、発掘調査は緊急を要することを確認した。しかし、既に群馬県埋蔵文化財調査事業団の当年度事業はスタートをしており、調査担当者の確保は困難な状況にあった。

沼田土木事務所と協議を重ねた結果、

- (1) 調査は群馬県埋蔵文化財調査事業団で受託し、担当として細野雅男第三課長が当ること
- (2) 調査の万全を期すため、文化財保護課、西田健彦文化財保護主事が応援すること
- (3) 調査は当該箇所の工事を56年度内で実施するのに支障のない対応をとること

で合意し、昭和56年7月27日～8月2日に実施することになった。

## 2. 調査の方法と経過

今回発掘調査した塚が経塚であることは地元民の話から調査前にわかっていた。それによると、塚の西側にはかつて荷車1台が通過できる程度の幅員の狭い道があったが、国道291号線を建設する時に塚の西半部を削り取ってしまい、その際に経文を書いた川原石が多数発見されたとのことであった。なお、昭和の初期にはこの塚は古墳として認知されており、『上毛古墳総覧』（昭和13年、群馬県）には桃野村第2号墳として掲載されている。

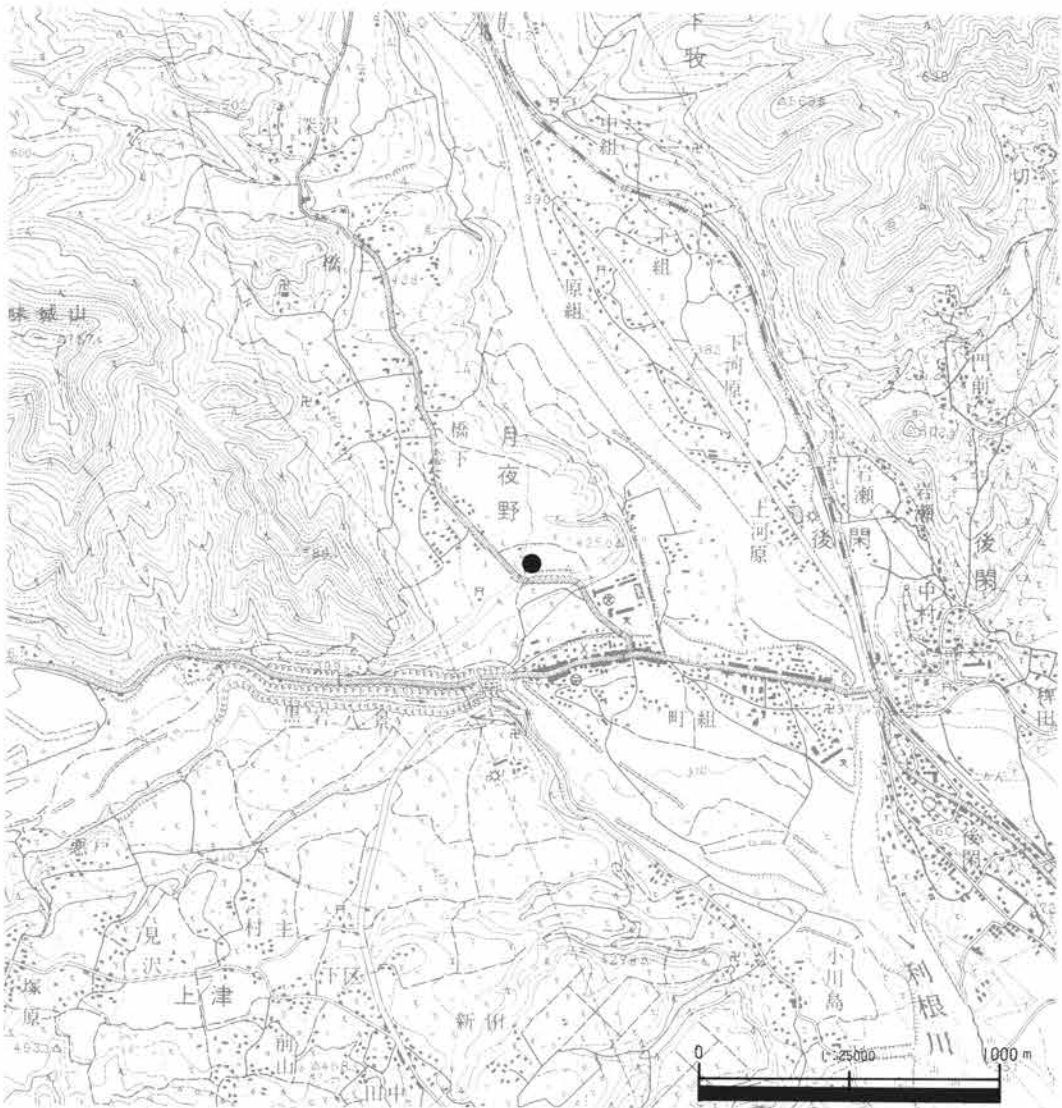
昭和56年度の国道291号線の改良工事では、新設のバイパスと現291号線とが立体交差し、現道が4～5m下がることになり、併せて拡幅が行なわれるので経塚は、すべてが消滅してしまうこととなった。それ故、調査区域は経塚の残存部のすべてとなり、まず盛土部分の現形測量と西側断面の精査を行なった。断面精査作業中にはいくつもの経石が発見され、国道建設時に経石が見つかったという地元民の話を裏づけていた。

頂上部に祀られていた明治25年建立の石仏を移設後、盛土の南北を横断するトレンチを設定し、北盛土の状況と経石埋納施設の検出を試みた。重機を使用してトレンチの掘削を行なったが、盛土の北側部分は経塚構築当時の形状ではなく、殆んどが近年の盛土であることが判明した。その後、トレンチを拡張する形式で新しい盛土を取り除く作業を実施した結果、調査前の見かけの墳丘よりもかなり小規模の本来の経塚の墳丘を検出することが確認できた。

### 3. 遺跡の位置と地形

菩提木遺跡が立地する場所は利根川と赤谷川との合流点の北西にあたり、標高は429mである。利根川の右岸の最上位の河岸段丘面が赤谷川によって切断される南端の地区であり、遺跡地から南方を臨むと正面に月夜野町上津の段丘面が広がり、南流する利根川の東には赤城山の北麓全体が見渡せるという眺望の良い所である。周辺は桑園及び水田としての土地利用が主であるが、近年宅地化が進み始めた地区でもある。

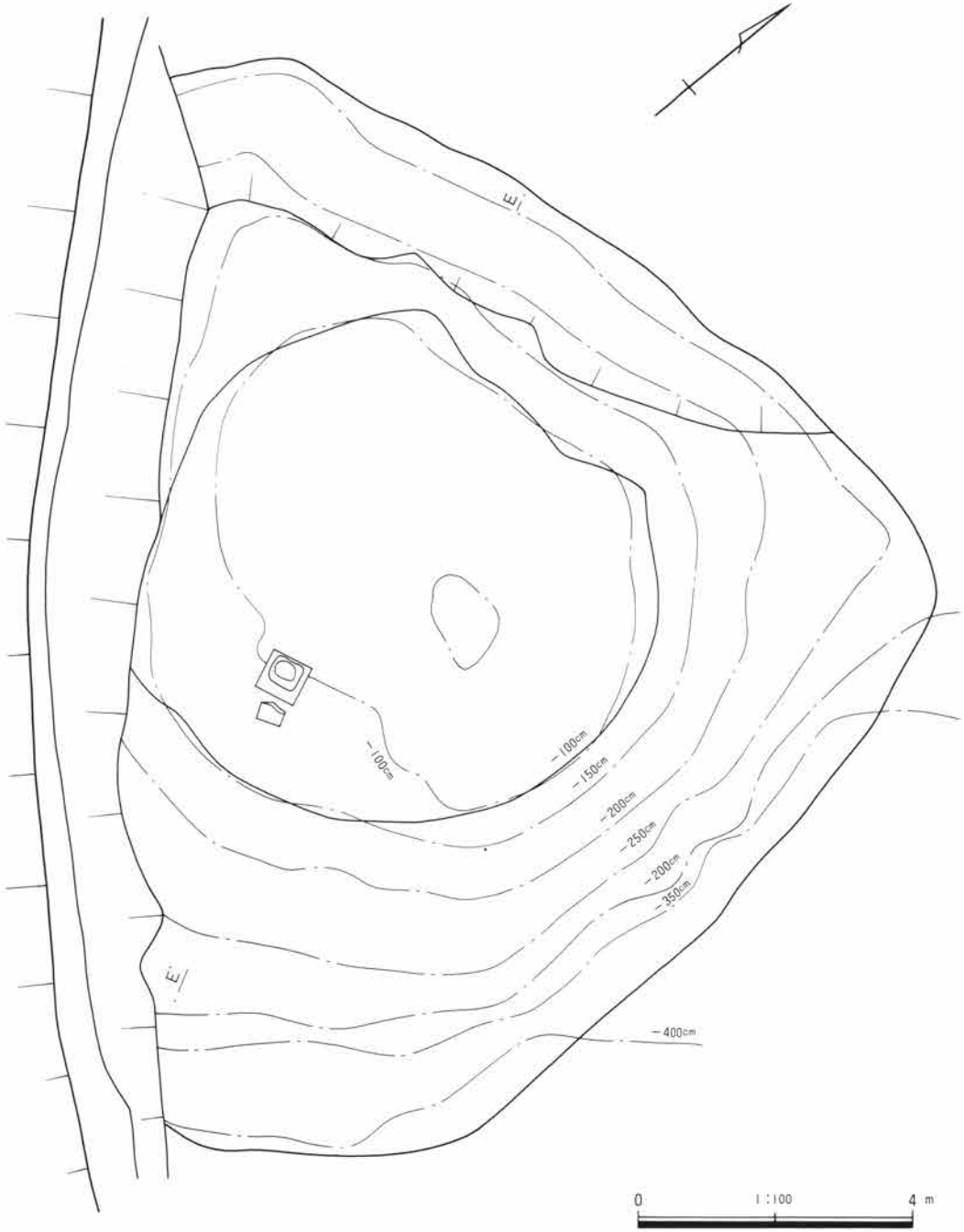
国道291号線は、利根商業高等学校の西を通り段丘面を登り上げる。経塚はこの道路が段丘面を登りつめた曲り角東側に位置し、道路より2m近く西側を削り込まれている。



第1図 遺跡位置図

## 4. 検出された遺構と遺物

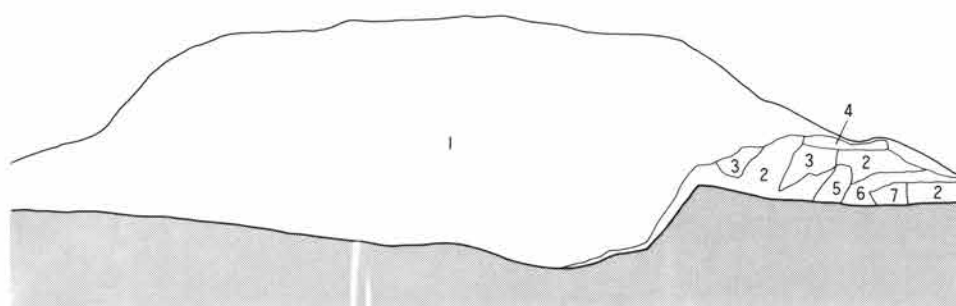
### (1) 遺 構



第2図 調査前平面図

E L=432.00 m

E'



第3図 盛土断面図

0 1:100 4 m

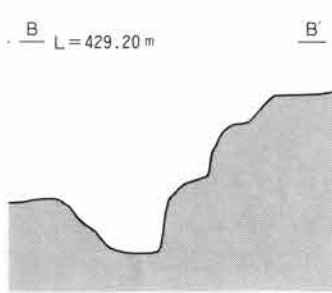
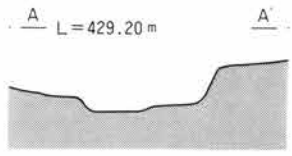
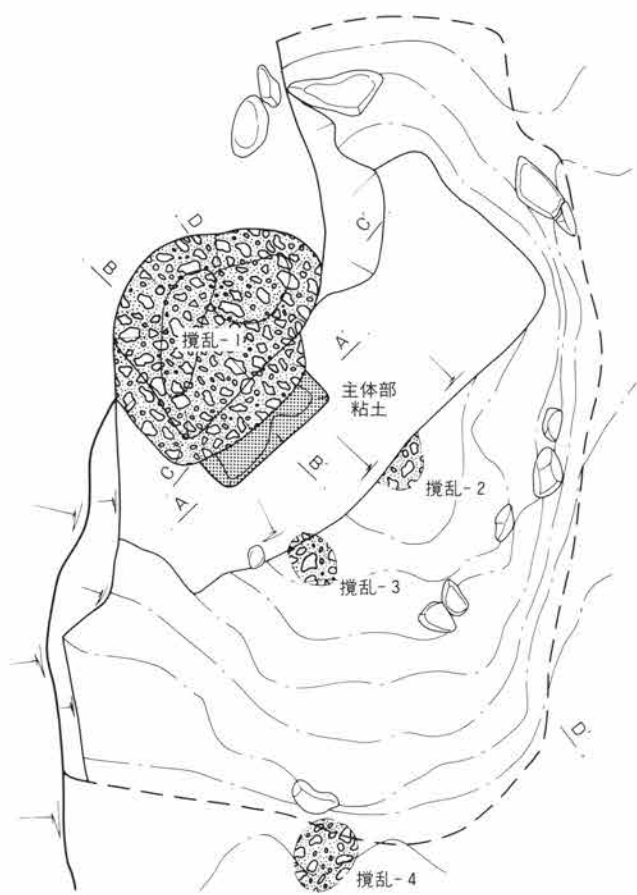
#### 土層説明

- |         |                     |         |                     |
|---------|---------------------|---------|---------------------|
| 1. 黄褐色土 | ローム主体、礫多量に含む、近年の盛土。 | 5. 黄褐色土 | ロームの盛土、固くしまる。       |
| 2. 褐色土  | 粒子細かくしまり強い。         | 6. 褐色土  | ロームの粒子含む。           |
| 3. 褐色土  | しまり強く、攪乱うける。経石混じる。  | 7. 黄褐色土 | ローム盛土、固くしまる。5層より固い。 |
| 4. 褐色土  | しまり弱く、攪乱うける。        |         |                     |

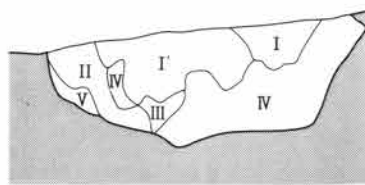
調査前の現形測量からは、経塚は平面形が方形で1辺が約12m、高さは3.0mの規模を持つであろうと推定された。各辺の方向はほぼ東西南北を示しており、頂上部には7m×7mほどの平坦部があった。この頂上平坦部の中央南寄りの位置に明治25年建立の銘文を持つ石仏が1体南向きに祀られてあった。そして盛土の南西部およそ3分の1の部分は国道291号線の建設によって切断されてしまっていると考えられた。

発掘調査が進むにつれて、経塚の周囲を覆い隠すような二次的な盛土がなされていることが判明した。この二次盛土を取り除くと、3m×5mの範囲に構築時の盛土が残存している状況を検出することができたのである。原形ともいべき盛土の北側の部分は土が取り去られてしまい、ひどく変形していた。また、西側は道路によって既に削平されてしまっていた。比較的残りの良かった南東部及び北西部の状況から原形を復原すると、経塚は径5mほどの円形又は、方形のプランを持ち、盛土の高さはおよそ1.5mのものであったと考えられる。盛土は周囲から中央に寄せ集めるような方法で盛り上げられており、版築による工法はとられていない。盛土の表面には20～40cm程度の大きさの石が数個認められたが、葺石と言えるほどではなく、頂上の部分を鉢巻き状に一周していたものかも知れない。

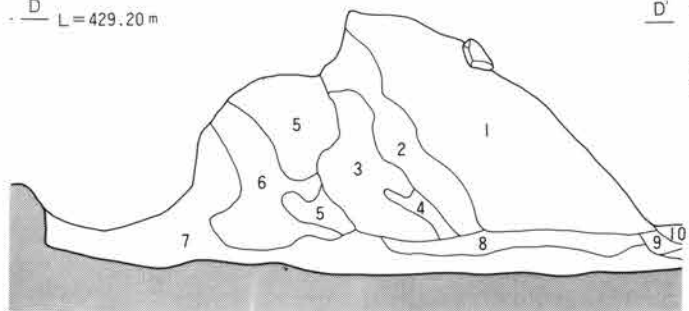
経石の埋納施設は中央部にわずかに残っていた。南北95cm、東西20cm、深さ20cmしか残っていないが、磁北に合致した方位で、方形のプランであった。埋納施設付近には攪乱穴があり、ここからも多量の経石が発見されているが、これは掘り出された経石を埋め戻した穴と考えられる。



C L=429.20 m C'



D L=429.20 m D'



土層説明

- |     |        |          |     |        |                   |
|-----|--------|----------|-----|--------|-------------------|
| I   | 攪乱     | ローム混じり。  | 1.  | 褐色土    | 細粒、しまり強い、軽石有      |
| I'  | 攪乱     | 経石含む。    | 2.  | 褐色土    | しまり強く、軽石、ローム粒子含む。 |
| II  | 茶褐色土   | 経石含む。    | 3.  | 黄褐色ローム |                   |
| III | 黒色土    |          | 4.  | 攪乱     |                   |
| IV  | 黄褐色土   | ロームブロック。 | 5.  | 明褐色ローム |                   |
| V   | 白色土粘土層 |          | 6.  | 黄褐色ローム |                   |
|     |        |          | 7.  | 灰褐色土   | 粘性あり、礫含む。         |
|     |        |          | 8.  | 褐色土    | 粒子細かく、7層鍋状に含む。    |
|     |        |          | 9.  | 黒褐色土   | 8層少量含む。           |
|     |        |          | 10. | 攪乱     |                   |

第4図 経塚実測図

## (2)遺物

### 経石

菩提木経塚出土遺物の殆んどは経石で4,000点を超える。その他にガラス製しょう油差しのふた、近代陶器片各1が出土している。調査によって、経塚の大部分は既に破壊され、経石も原位置をとどめるものが少ないことが判明した。地元民の話からは、戦前の道路工事で経石が出土したため、再度埋め戻したとのことである。原位置と推定されるのは第1表の粘一1である。それを含め

て出土地点・個数・判読数及び筆跡の分類は第1表のとおりである。

出土地点	個数	判読数	筆跡による分類			
			A	B	C	不明
K-1	1872	998	177	346	456	19
K-2	342	151	35	82	34	
K-3	81	14	8	6	0	
K-4	295	123	26	81	16	
粘一1	1140	466	86	356	23	1
その他	312	159	18	132	9	
計	4042	1911	350	1003	538	20

#### 筆跡による分類の基準

- A一人(A)の筆跡と推定できるもの
- B2～3人の筆跡があると推定できるものの分類判別が難しい為、一括してBと分類したもの
- C一人(C)の筆跡と推定できるもの  
但し複数(2人)の可能性もある
- 不明一判別が難しいもの。梵字を含む

(写真参照)

出土地点のK-1は、攪乱孔1の略

て出土地点・個数・判読数及び筆跡の分類は第1表のとおりである。

経石は全て川原石を使用し、石質は選んでいないようである。大きさ、形状もまちまちで、大きいものは25cm×20cm位の扁平なものから、小は1cm×1cm程度のものまでであるが、多くは長径10cm～3cm位の間にいる。形状は扁平なもの、厚みがあるもの、角ばったものなど多様で、なかには、割れた石の使用もある。特に石を留意して選別した様子はなく、字の書ける川原石を無雑作に持ってきたように見受けられる。

#### 経石の分類

分類にあたり、出土地点が既に攪乱を受けていることから、筆跡の違いによる分類を示す。A・B・Cは、第1表の分類である。文字上の表・横・裏は、文字が石の各々の面に書かれていることを示すが、読み方の順序は不明である。左肩の数字はその文字の頻度数を表す。□は読み方不明の文字・右下の?ははっきり判読の難しい文字・偏や傍の?は、その部分が不明の文字を示す。

#### A

##### 一石多字のもの

表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏																				
□	中	内	西	釋	□	□	□	□	記	□	経	□	祈	疑	欲	自	病	即	滅	消	示	集	巨	集	一	人	横	三	穴	多	□	廻	充				
表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏		
摩	□	求	□	衆	生	負	□	妙	衆	塗	香	各	右	如	来	卒	求	妙	法	釋	禄	不	得	一	切	□	記	□	司	會	任	新	□	知	□	□	□

##### 一石一字のもの





親 積 清 死 書 辱 淨 礎 聚 足 師 壹 請 椎 舌 實 殊 早 色 釋 食 樹  
 漸 即 字 掌 誅 濁 男 智 等 第 童 戶 宅 通 段 登 定 丹 帝 尊 轉 殿  
 出 堂 動 度 他 塔 旦 但 抬 乃 入 何 涅 汝 武 波 巾 福 兵 奉 本 老  
 非 付 嶋 普 復 寶 破 表 彼 符 婆 別 露 笠 令 松 輪 和 牟 4 諭 毛 2 詭 木 2 明 2 名 2 薩  
 命 妙 曼 茂 又 問 未 哉 夜 立 綠 舜 永 后 苻 傘 胤 義 4 徚 滯 師 任 芥 右  
 鹿 台 詈 史 壽 優 舛 來 甚 迎 豸 豸 廿 分 陵 苻 大 總 今 徚 偏 我 垢 最 弗 黎  
 看 罽 呼 單 仟 喜 受 應 空 躬 哉 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸  
 乖 靴 呼 單 仟 喜 受 應 空 躬 哉 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸 豸  
 禾 受 復 壩 匹 後 有 禮 等 武 高 復 苦 秋 古 異 才 羅 殿 宙 有 諾  
 夏 佻 茂 山 後 立 德 衛 武 高 復 苦 秋 古 異 才 羅 殿 宙 有 諾  
 心 全 亥 犢 辟 在 者 者 之 之 堂 六 紱 刀 遇 羅 殿 宙 有 諾

C

一石多字のもの

陀南無阿彌佛絡南無□□舞 者彼□昭音皆家一才□□案而將大 見色諸像鐵 南無王 潛□□  
 自增□ 大詞□尽 □無弱無怯 你伙 絡垂 俱皆 諸傳 訶 如 年無□ 一切 一我 三明  
 典英□ 舌香□ □之□ 表觸供 □尊 表亡者 表國土 表女汝 表薩 表阿五 表龍宮 表若南  
 表無發 表夜長 表尊 表耶是 表菩薩 表慈心 表天王

一石一字のもの

13 若	11 所	9 是	8 菩	8 諸	8 生	8 香	8 我	7 佛	5 天	6 薩	5 尊	5 世	5 衆	5 者	5 於	4 見	4 子	4 大	4 聞	4 欲	3 音	
3 行	3 界	3 而	3 之	3 師	3 女	3 其	3 須	3 十	3 在	3 得	3 德	3 能	3 人	3 白	3 有	4 羅	2 演	4 以	4 為	4 因	2 眼	
2 互	2 此	2 客	2 賢	2 可	2 國	2 教	2 俱	2 何	2 淨	2 切	2 舌	2 宿	2 千	2 身	2 車	2 種	2 受	2 宣	2 春	2 定	2 中	
2 男	2 二	2 百	2 不	2 法	2 無	2 利	2 來	2 安	2 雲	2 御	2 或	2 卸	2 惡	2 應	2 阿	2 厭	2 卯	2 園	2 王	2 伽	2 求	
訶	合	嚴	開	詣	嶽	外	義	華	却	下	挾	佞	干	群	鬼	喜	功	根	願	角	求	
吉	祈	火	覺	該	言	具	加	久	形	間	今	空	高	偈	敬	欣	牛	道	持	山	志	
仁	囑	財	旬	士	釋	歲	甚	乃	設	掌	前	草	周	昔	最	妙	舍	思	邪	聲	熱	
從	作	寸	臣	正	殊	親	寫	清	相	住	土	童	候	細	助	小	誠	如	對	熱	夢	
頂	當	刀	東	陀	誦	道	動	導	但	達	反	龍	梵	典	度	楯	第	登	門	茂	輕	
汝	任	方	訖	分	婆	復	八	問	凡	變	蓮	惑	亘	福	比	父	彼	門	遵	輕	寐	
摩	并	名	尤	彌	萬	命	實	亦	夜	履	剎	為	尋	3 余	濱	切	施	亦	君	欠	酒	
說	悉	果	彗	解	卅	卒	平	土	古	經	卒	為	度	鈺	勤	華	樓	近	君	欠	酒	
癡	獶	币	兀	フ	認	履	權	念	經	卒	為	度	鈺	勤	華	樓	近	君	欠	酒	酒	
誌	其	得	去	母	菩	女	淨	若	者	者	者	岸	岸	生	答	杓	司	司	司	司	司	司

[經典の特定]

磔石經に用いられる經典としては、「浄土三部経」(「無量寿経」・「観無量寿経」・「阿弥陀経」)

や「五部大経」（「華嚴経」・「大集経」・「大品般若経」・「妙法蓮華経」・「涅槃経」）、その他「観音経」・「無量義経」・「観普賢経」・「大日経」・「弥勒経」などが知られている。この中で、最も多い用経は「妙法蓮華経」である。

本件の分析に際しては、以上のなかから使用例の多い、「無量寿経」・「観無量寿経」・「阿弥陀経」・「妙法蓮華経」・「無量義経」・「観普賢経」を参照しながら特定を試みた。

なお、前項で示されたように、本件は3種類の筆跡が確認されているので、A・B・Cのそれぞれについて、次いで全部をあわせて検討をおこなった。遺物の判読された文字を、經典文字と照合したところ、「浄土三部経」はいずれもが比較的短かい經典であり、文字の上からも適合せず、「妙法蓮華経」以外の諸経も同様に該当しないことが判明した。

しかしこのことが、本件が「妙法蓮華経」であることを決定するものとはならない。「妙法蓮華経」自体は巻第一から巻第八まで、「序品第一」から「妙法蓮華経普賢菩薩観発品第二十八」までの69,828字に及ぶ大経である。これに対して、本件で判読できたものは1,911点にすぎず、本件が仮に「妙法蓮華経」であったとしても、全体の3%以下であるので、単に可能性があると考えられるにとどまる。ただ一石多字のものの中に「病即滅消示」があり、これが「妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三」の中に「病則消滅不老不死」の語に通ずるところがあることから、施主が「妙法蓮華経」を熟知した者であることを想起させる。

さらに、「妙法蓮華経」とに関わるものを掲げるならば、「七寶妙塔」が同経提婆達多品第十二」の中の「礼拝供養七寶妙塔」・「同経從地涌出品第十五」の中の「各詣虚空七寶妙塔多寶如来积迦牟尼仏所」の語があり、「衆妙」は「同経序品第一」に「衆妙臥具」として見えている。また、「龍宮」は前記「第十二品」にのみ認められ、「母」は「同経妙莊嚴王本事品第二十七」に特出する。加えて、「妙法」や「塗香」は各品に数見する。

以上より推定するならば、先に述べたように、本件が「妙法蓮華経」である可能性が強く、経中の「序品第一」・「同経提婆達多品第十二」・「同経從地涌出品第十五」・「同経妙莊嚴王本事品第二十七」の名品が含まれていたことが考えられる。

(唐澤至朗)

(参考文献)

- |              |                |      |              |
|--------------|----------------|------|--------------|
| 国民文庫刊行会      | 『国譯大藏経』        | 国刊行会 | 1935年(昭和10年) |
| 財団法人 東洋哲学研究所 | 『法華経一字索引』      | 同研究所 | 1977年(昭和52年) |
| 石田茂作・他       | 『新版仏教考古学講座』第六卷 | 雄山閣  | 1977年(昭和52年) |
| 三宅敏之         | 『経塚論故』         | 雄山閣  | 1983年(昭和58年) |

## 5. まとめ

経塚の発生は平安中頃とされ近世にまで続いている。菩提木経塚は径5m程の円形(又は方形)の規模で、礫石経(一字一石経)を埋納したものであるが、昭和9年頃の道路工事の際に大部分が破壊され、発掘調査からは、経塚築造の目的・時期等ははっきりしないものの、状況からは近世のものとして推定された。経石からは、経典が「妙法蓮華経」の可能性が示され、少なくとも3名の手で筆写されている。

地元に伝わる話に、この付近には大きな松があり、その存在は遠く総社方面まで伝わっていたというのがある。<sup>(注1)</sup> その松について、小川城根元記<sup>(注2)</sup>に次のように記されている。

### 菩提木一本松の事

天正年中北条氏邦小川可遊齊合戦之時 人多く死ス 依之其後は暮六ツ時より其異魂出人之通路難成 諸人難義ニおよひ候故 岳林寺天慶和尚大施我鬼致シ 塚ヲ築キ松ヲ植る 今之松是也 其後享保八年地蔵尊建 同十八年宝篋印塔建ル 是よりして異魂之禍ひなし

岳林寺天慶和尚は、寺伝に依れば天正以前の永禄5年に没<sup>(注3)</sup>っており、又、前記文書は伝承を集成したものと考えられることから「塚ヲ築」も事実と確認できないが、これを信ずるとすれば近世初頭のものとなる。しかし、享保年間に「地蔵尊」「宝篋印塔」が建立されるとあり、何らかの行事(追善供養)が行われたのであろうし、この時経石を埋納したことも考えられる。現在地蔵尊・宝篋印塔<sup>(注4)</sup>は無く、明治25年建立相州最乗寺と刻む不動明王石像が安置されていたが、今はバイパス際に置かれている。いずれにしろ、一石多字の文の分析・他の経塚発掘の類例を待ち検討を進めたいが、当地域に経塚を築いた信仰集団があり、その事実を伝承した人々の存在をうかがわせる好資料といえよう。

(注1) 月夜野町文化財調査委員 武川建治氏教示。

(注2) 月夜野町月夜野 橋本朝治氏所有、小川城興亡の伝承と、小川・赤松・真田家系図、その他地域の伝承と火災等の記録を集録。文久3年の火災記録よある事から江戸末の編さんであろう。

(注3) 月夜野町教育委員会・岳林寺住職 植茶知龍氏教示。

(注4) 昭和9年の道路工事で経石と共に四角な石も出土したという。その石は寿命院に運ばれたというが現在不明。

# 写 真 图 版





経塚調査前



盛土断面

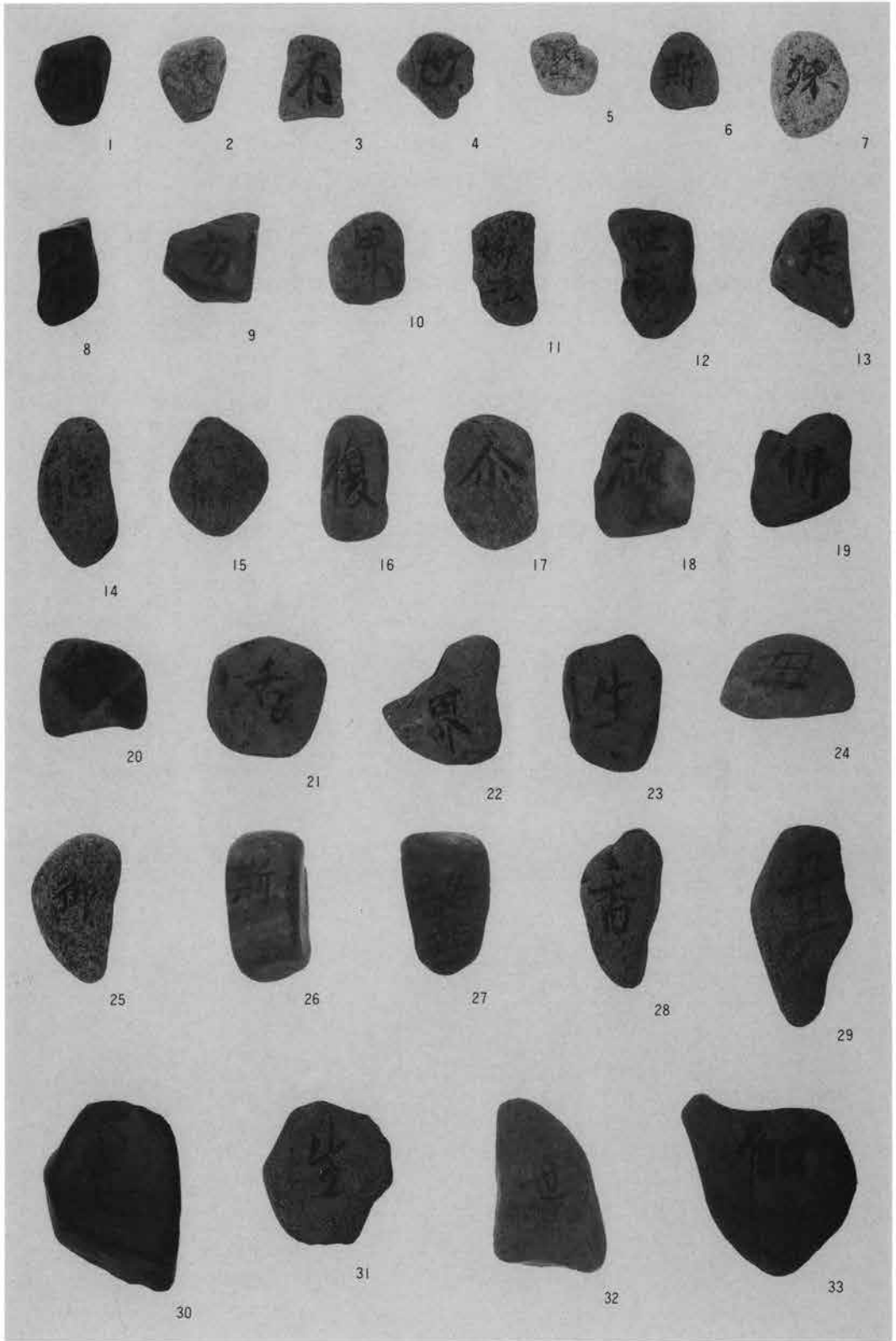


経塚本体

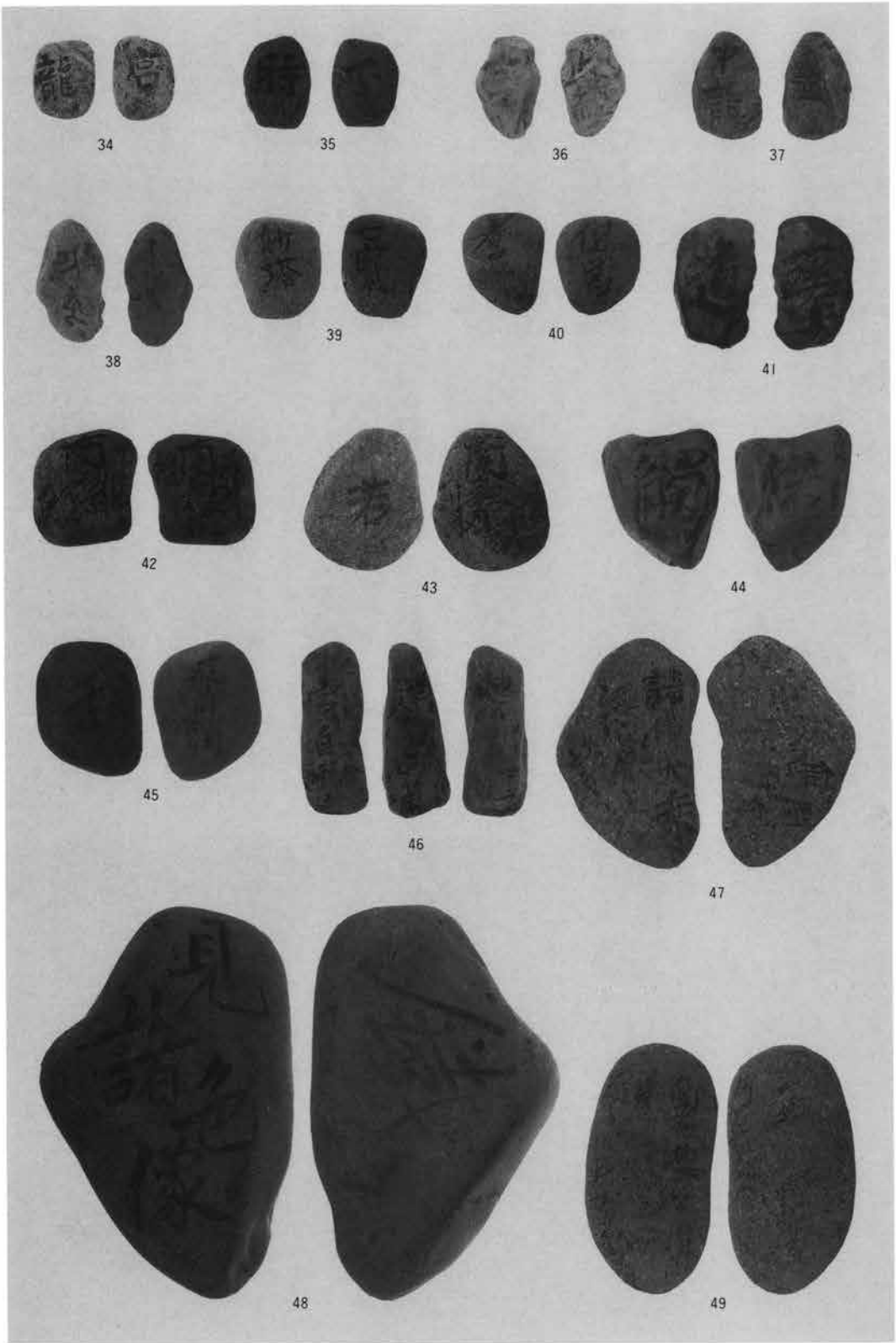


経塚盛土断面

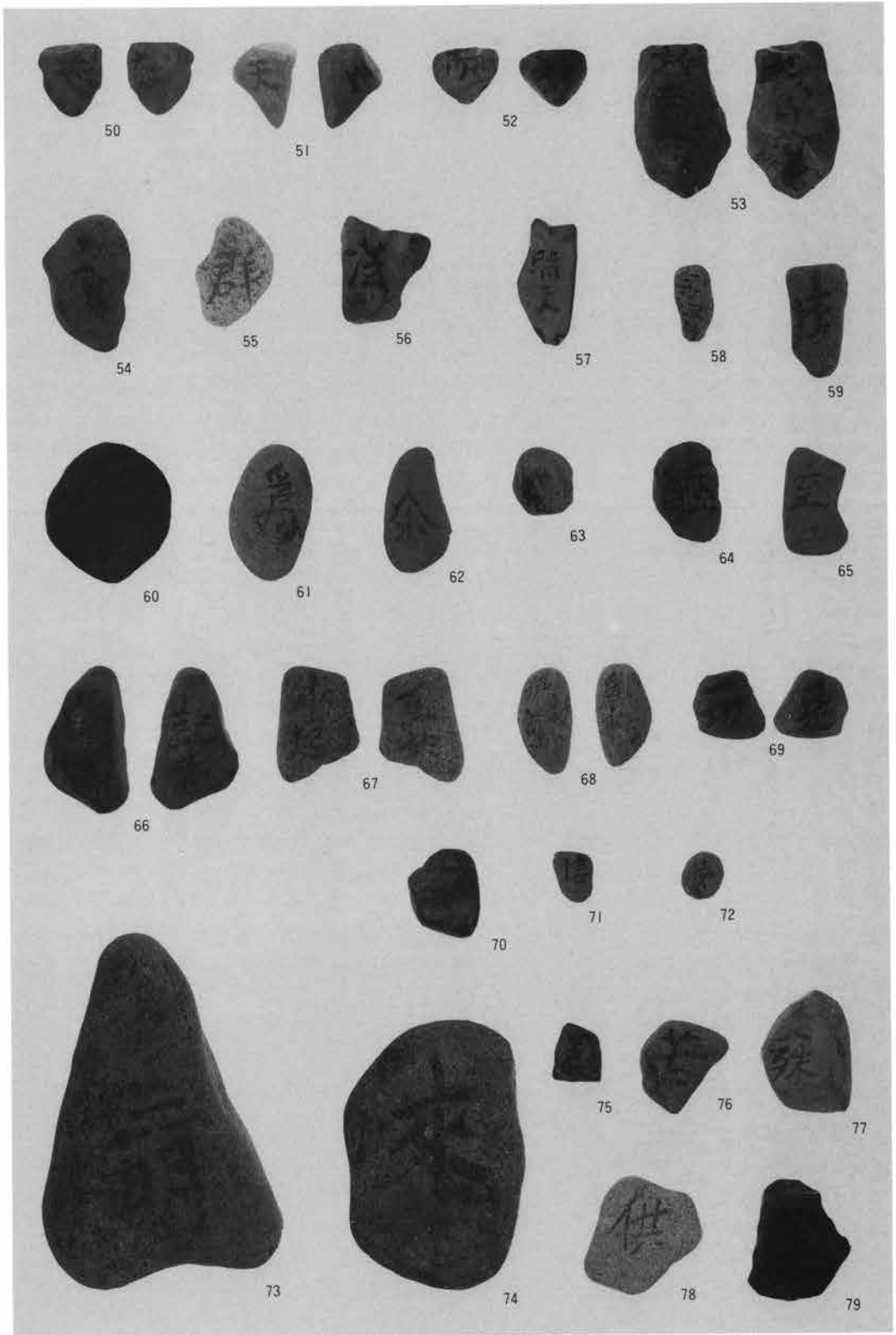




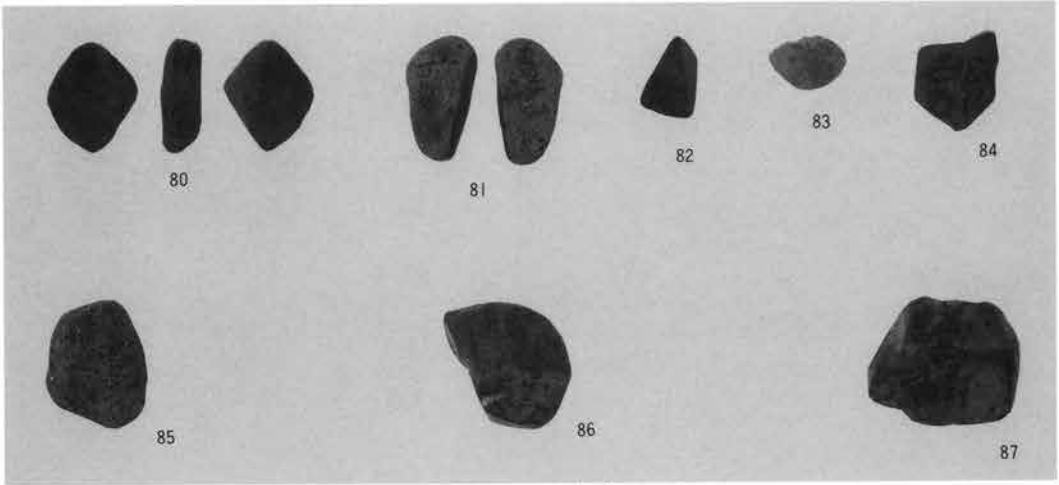
経 石(1)



経 石(2)



經石(3)



経 石(4)

# 菩提木遺跡

国道291号線道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和57年3月26日 印刷

昭和57年3月31日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社